

令和元年度発掘調査速報展

あ が た ひ さ こ づ か ご う ふ ん
阿方瓢塚 2 号墳

■ はじめに

今治市教育委員会では、遺跡の発掘調査を実施しています。今回は発掘調査速報展として、古墳時代後期～終末期（約 1,450～1,350 年前）の古墳である阿方瓢塚 2 号墳の調査成果について解説します。

【展示期間】令和元年 8 月 31 日～令和 2 年 1 月 13 日

※現在整理作業中のため、今後内容が変更になることがあります。当資料の 2 次利用・転載等はこちらまでご連絡ください。

■ 調査の概要

場 所：今治市阿方

期 間：平成 29 年 11 月 27 日～
平成 30 年 6 月 15 日

面 積：約 177 m²

備 考：平成 27 年度の試掘調査で新発見



▲ 阿方瓢塚 2 号墳遠景



▲ 調査前の阿方瓢塚 2 号墳

■ 周辺の環境

阿方瓢塚 2 号墳は、阿方地区の中央部や北西寄りに位置し、近見山の南側に伸びる丘陵尾根上の標高約 54m の地点に築かれています。当古墳から東側には谷状の平地が広がっており、そこでは弥生～古墳時代、中世の集落跡である阿方中屋遺跡が見つかっています。また、北東側の丘陵部には弥生～古墳時代の遺跡が多数分布し、西側にも中世の遺跡である延喜 1 号遺跡や延喜向遺跡が発見されているなど、周辺一帯は遺跡が密集している地域として知られています。



▲ 阿方瓢塚 2 号墳の位置

■ 1号石室の調査成果

未盗掘古墳

1号石室は小さな横穴式石室で未盗掘の状態で発見されました。羨道をもたず、素掘りの墓道と玄室が直接繋がっています。そのため玄室の入り口を石で閉じていました。石室は南北方向を向いており北側が入口です。石室と墓道の上に墳丘を築いており、墳丘に穴が掘られた痕跡がないことから一度埋葬された後は、開けられることがなかったと分かります。一部に土の流入等ではありますが、石室内は約1,400年前の状態がそのまま保たれている可能性が高いです。古墳が未盗掘で見つかることはまれで、貴重な事例と言えます。



▲ 1号石室内部



▲ 1号石室内の床面

小さな横穴式石室

1号石室の特徴として、とても小さな石室であることが挙げられます。長さ約1.6m、幅約0.6m、高さ約0.8mの大きさで、一人用の石室と思われます。小さいながらも通常の横穴式石室に使われるような技術で造られており、あえて小さなものを作ったような印象を受けます。石室内からは須恵器の短頸壺、鉄器（鏃、刀子）、玉類が発見されました。奥壁の周りに短頸壺、入口から見て右側に刀子、左側に鉄鏃が置かれ、中央付近には土玉が散らばった状態で見つかりました。人骨も発見されましたが、現時点で埋葬された人物の性別などは不明です。1号石室は2号石室よりも新しい7世紀前葉以降のものと考えられます。



▲ 1号石室で見つかった須恵器



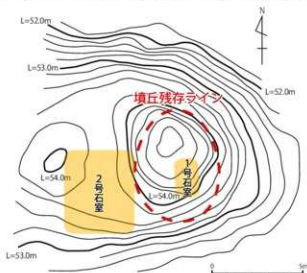
▲ 1号石室で見つかった鉄鏃



▲ 1号石室で見つかった刀子

■ 阿方瓢塚2号墳の概要

阿方瓢塚2号墳は古墳時代後期～終末期（約1,450～1,350年前）の古墳です。直径約6m、高さ約1mの円形の盛り土がされています。この古墳からは1号石室と2号石室の2つの横穴式石室が見つかり、1号石室は未盗掘であることが判明しました。1号石室は7世紀前葉以降、2号石室は6世紀後半～7世紀前葉のもと考えられます。これらの石室は元々別の古墳のもものと思われ、2号石室があった古墳が壊された後に1号石室と現状の墳丘が造られた可能性があります。



▲ 阿方瓢塚2号墳地形測量図



▲ 1号石室（右）と2号石室（左）



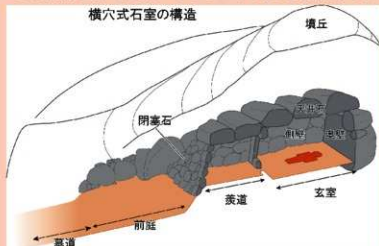
▲ 1号石室と墳丘

▼ 阿方瓢塚2号墳関連年表

時代	西暦	出来事	
弥生時代	終末期	239 ・卑弥呼が魏へ使者を送る 248 ・卑弥呼没（魏志倭人伝） 250	
	古墳時代	前期	
		中期	400 ・大仙古墳が造られる (5世紀前半～中頃)
後期		500 527	
飛鳥時代	後期 (古墳時代終末期)	574 ・聖徳太子が生まれる 600 607 ・遣隋使を派遣 645 ・大化の改新	
	奈良時代	694 ・藤原京が造られる 710 ・平城京に都をうつす 752 ・東大寺の大仏が完成する	

横穴式石室とは？

横穴式石室は古墳時代後期（約1,500～1,400年前）に主流となる古墳の形態の一つです。主に遺体を埋葬する部屋（玄室）と入口に繋がる通路（羨道）で構成されます。埋葬後は通路の入口を石で塞ぎますが、石をどけることで再度埋葬（追葬）できるのが大きな特徴です。



▲ 横穴式石室の構造模式図

■ 2号石室の調査成果

破壊された古墳

2号石室は大きく壊された状態で見つかりました。壁の石は根こそぎ抜かれており、発見時点では2つしか残されていませんでした。徹底的に石が抜かれていることから石材目的の盗掘を受けたと考えられます。かろうじて壁石の痕跡や床石は残されており、それらをもとに推定すると長さ約3m、幅約1.8m、高さ1m以上の玄室と幅約1m、長さ1～2m程度の羨道をもつ横穴式石室だったと考えられます。



▲ 2号石室

残されたモノと埋葬

2号石室からは土師器(鉢)や須恵器(坏身、短頸壺、甗)、鉄器(鉄、鋤先、鎌)、玉類(切子玉、管玉、ガラス玉、土玉)などが見つかりました。出土品には時期差があり、複数回の埋葬が行われたと考えられます。入口周辺では赤い顔料が塗られた土師器が発見されていて埋葬の儀礼に関係する可能性があります。2号石室は6世紀後半から7世紀前葉にかけて利用されたと考えられます。



▲ 2号石室で見つかった須恵器



▲ 2号石室で見つかった切子玉



▲ 2号石室で見つかった管玉



▲ 赤い色が塗られた土師器

■ おわりに

阿方瓢塚2号墳からは未盗掘の1号石室と大規模な破壊を受けた2号石室という対照的な2つの石室が見つかりました。それぞれの石室の特徴をまとめると以下の通りです。

1号石室

- ・ 7世紀前葉以降
- ・ 未盗掘古墳
- ・ 1回の埋葬
- ・ 非常に小さな横穴式石室

2号石室

- ・ 6世紀後半～7世紀前葉
- ・ 大規模な破壊(石材目的か?)
- ・ 複数回の埋葬

阿方瓢塚2号墳が造られた時期は、古墳時代から飛鳥時代へと移り変わっていく段階で、国家の成り立ちを考える上でとても重要です。そうした時期の未盗掘古墳を調査できた意義は大きく、今後も周辺の遺跡や中央政権との関係を含めて検討を進めていき、今治の歴史を明らかにできるよう努めていきます。